Osaka University Knowledge Archive

Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】　千葉泉教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2024, 50, p. 303-309
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94739
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【定年退職教授の履歴および主要業績】

千葉（ちば）　泉（いずみ）　教授

千葉（ちば）　泉（いずみ）　教授

1982年3月　東京外国語大学スペイン語学科（卒業）
1984年3月　東京大学大学院社会学研究科国際関係論専門課程修士（修了）
1984年10月　東京外国語大学大学院地域研究研究科研究生（1986年3月まで）
1986年4月　東京外国語大学大学院地域研究研究科修士課程アジア太平洋地域コース入学
1987年4月　チリ共和国チリ・カトリック大学芸術学部音楽学校大学院留学（1988年9月まで）
1989年3月　東京外国語大学大学院地域研究研究科修士課程アジア太平洋地域コース中退
1989年4月　大阪外国語大学外国語学部　講師（イスパニア語初級文法）（1994年12月まで）
1993年10月　文部省在外研究員としてチリ共和国カトリック大学哲学部に招聘（1994年1月まで）
1995年10月　大阪外国語大学外国語学部　助教授（イスパノアメリカ歴史文化研究）（2007年3月まで）
2007年4月　大阪外国語大学外国語学部　教授（2007年9月まで）
2007年10月　大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻　教授（2016年3月まで）
2016年4月　大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻共生学系　教授（2024年3月まで）

千葉泉教授は昭和57年3月に東京外国語大学スペイン語学科を卒業後、同年4月に東京大学大学院社会学研究科に進学し、昭和59年4月に修了した。その後、東京外国語大学大学院地域研究研究科の研究生を経て同大学院に進学、昭和62年4月から63年9月までチリ共和国チリ・カトリック大学芸術学部音楽学校大学院に留学し、平成1年3月に東京外国語大学大学院を退学、同年4月に大阪外国語大学外国語学部の講師として着任した。チリ共和国カトリック大学哲学部での文部省在外研究員、大阪外国語大学外国語学部助教授を経て、平成19年4月同大学教授に昇任した。大学合併後は大阪大学大学院人間科学研究科教授として独自の研究、教育、社会的実践の持つ新たな可能性を切りひらき、学問や大学における多大な貢献をし、令和6年3月31日限りで定年退職される予定である。

25年にわたる在職中、主査を務めた博士論文は4件ある。また、一般社団法人農村環境整備センターおよび緑資源公団「南米における村づくり委員会」チリ委員会・社会学専門家や、琉球大学スペイン文化研究会（SHURY）第13回スペイン語弁論大会・審査委員長、公益財団法人 関西・大阪２１世紀協会 日本万国博覧会記念基金事業審査会審査委員等を務められてきた。

千葉教授の功績は、既存の研究や教育という枠だけでは捉えきれない。千葉教授は、歴史学者、地域研究者、人類学者、大学教員として研究、教育に従事しながら、そのときどきの研究や教育内容と相互に影響しあう音楽活動を継続してきた。千葉教授作詞・作曲によるスペイン語や日本語の数多くの作品、沖縄の三線からアンデスのチャランゴ、チリのギタロンまで国内外のさまざまな楽器を自由自在に扱う演奏の様子、そして力強いその歌声は、これまでの研

究活動に関わった国内外の調査協力者や、千葉教授のもとで学んだ学部生や院生、またそのすばらしさを耳にした学外の多くの人びとを広くエンパワーしてきた。

そんな音楽演奏家・作曲家としての千葉教授の原点は、東京大学大学院社会学研究科に在籍中に出会ったラテンアメリカの音楽にある。千葉教授は、当時のラテンアメリカ社会が抱えていた政治的な諸問題を告発し、よりよい社会の建設を訴える「新しい歌」や、その歌い手たちが農村部などで採集した伝統的音楽についての研究を続けるため、東京外国語大学大学院の修士課程へ改めて進学した。

院在籍中、ロータリー・クラブの奨学生としてチリへ留学した千葉教授は、チリ中央部の農村に伝わるカトリック系の民謡「カント」と出会い、歴史学的アプローチからその現状や変遷についての研究を展開させることとなった。このときに千葉教授が自然に開発し実践していたのが、現地の歌い手たちの一人として自らも儀礼や演奏の場に参与し演奏する、という独創的なスタイルのフィールドワークだった。従来の研究者が用いていた参与観察に対し、千葉教授はカントの儀礼に「歌い手」という極めて重要な役割を担う形で参加した。そしてこれらの経験から体得したラテンアメリカの伝統的歌謡や新しい歌を演奏、普及する活動に従事するかたわら、数多くのオリジナルな音楽作品（歌）を生み出してきた。さらに近年、東北地方の民謡からインスピレーションを受けた作品も意欲的に発表している千葉教授は、日本で活躍を続ける現代の「新しい歌」の歌い手の一人である。

一方、ラテンアメリカ地域研究者としての千葉教授の功績は、先に挙げた「カント」の歴史学的研究に加え、チリの先住民マプーチェ社会の変容に関する研究や当時はまだ珍しかったラディカルなオーラルヒストリー研究でも知られる。

大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）に着任後、千葉教授は現地の文化人類学者でさえ習得が難しいマプーチェ語を自学した。こうして修得した現地語の運用能力により、古文書など記述された資料のみを一次資料とする研究にとどまらず、「積極的」参与観察というスタイルでの研究に取り組み、ギターや音楽、言語を含む広義のコミュニケーション力を最大限に活かしたフィールドワークによる成果を次々と発表した。このなかには、マプーチェの民間医療や邪視（マル・デ・オホ）をめぐる現状、伝統的治療者マチ（マプーチェのシャーマン）のオーラルヒストリー、マチの継承にあたって夢が果たす役割について、さらに現代チリにおける民間医療と近代西洋医療との多元的医療体制の実態などに関する研究が含まれる。

この間の千葉教授の研究のスタイルやその成果は、より実践的な面でも活かされることとなった。その一つが、日本の ODA によるチリでの「住民参加型」農村振興プロジェクトに、短期専門家として参加した際の功績だ。現地での滞在がわずか三週間ほどであったにもかかわらず、千葉教授はギターを片手に現地の農家を次々と訪問し、共に歌い演奏することをとおして、このプロジェクトの核であった「住民参加」を可能にする、現地の人びとのリアルな声に丁寧に耳を傾けた。千葉教授の従来の「専門家」らしからぬ振る舞いは、同プロジェクトの「支援される側」である住民と「支援する側」の専門家の間で暗黙裡に築かれ、「住民参加」という本来の趣旨を妨げかねない課題となりつつあった両者間の心理的な壁を鋭く問い直し、関係者らの反省を

促すものであった。

大阪大学大学院人間科学研究科における共生学系設立以降は、チリでの経験を踏まえた対話や音楽を実践することで、大学内外での共生的教育や活動を展開した。大学内では、講義やゼミにおいて、千葉教授は自らの弱さを含む経験を積極的に開示しつつ、受講生と対等な関係の構築に努めながら、対話的な教育を実践してきた。とりわけ、各々が自分自身の経験そのものをレジュメにまとめ、少人数で発表しあう「語り合い」は、自己および他者の新たな一面を発見すると同時に、時に全く異なる背景を持つ人同士の共感を誘発する場となった。この「語り合い」を通して、多くの指導学生･院生が、研究内容と自己の関係を見つめ直し、オリジナリティの高い学位論文や学術論文を執筆する事が可能となった。他にも千葉教授は、自己省察を促す「綴り合い」や、ウクレレの弾き語りを用いた表現と協働など、受講生の創造性を引き出す授業を行ってきた。これらのユニークな教育が評価され、大阪大学生協学生委員会が 2017 年に機関紙『Handai Walker』で実施したアンケートで「大阪大学でいっちゃんおもろい教授」に選ばれたほか、毎日新聞、朝日新聞や関西テレビ、朝日放送テレビ、NHK ラジオなど各種メディアにも取り上げられた。

さらに、大学外では、国立民族学博物館での講演や演奏、京都府京北町や岩手県野田村でのコンサートとシンポジウムを融合したコンポジウム、淡路島のニホンザルの共生的行動を題材とするオリジナル・ソングの作曲をはじめ、学術成果の社会的還元に関する既存の枠組みを超えた活動により、あたたかい空間や関係性の創出に寄与した。また対話的実践に関しても、NEC 未来創造会議との共創により、「語り合い」の社会実装にむけた試行錯誤を行い、大学での教育にとどまらない対話の社会的意義を示した。

主　要　業　績

主要著書

1. 千葉泉 2020『“研究者失格” のわたしが阪大でいっちゃんおもろい教授になるまで― 弱さと向き合い、自分らしく学問する』明石書店。
2. 千葉泉 2014『「自分らしさ」をこころの中心に―未来に向かって歩むみなさんへ』多文化共生を考える会。
3. 千葉泉 2003『国際理解に役立つ世界の民族音楽 : ⑥ 南・北アメリカの音楽』、ポプラ社。
4. 千葉泉 1998『馬に乗ったマプーチェの神々―チリ先生民文化の変遷』大阪外国語大学学術双書 19、大阪外国語大学学術出版委員会。

他 16 編

主要学術論文

1. 千葉泉 2016「共生のためのコミュニケーションツールとしての音楽」河森正人、栗本英世、志水宏吉（編）『共生学が創る世界』大阪大学出版会、250-262。
2. 千葉泉 2009「「自分らしさ」を中心に据える―私が中南米の歌をうたう理由」東京大学東洋文化研究所『東洋文化』第 89 号 : 41-65。
3. 千葉泉 2005「『祝祭』から『昇華儀礼』へ―チリ中央部における幼児洗礼の変遷」『大阪外国語大学論集』、第 31 号 : 1-27。
4. 千葉泉 1999「マプーチェ歴史伝承、チョルチョル地区（１）－ロサ・バーラ・カユルの語る「平定」」『大阪外国語大学論集』、第 21 号 : 193-215。
5. 千葉泉 1988「チリにおける宗教民謡『カント・ア・ロ・ディビーノ』―スペイン『教養』詩の詩型を同化したチリ農民」『地域研究』第 6 号 : 75-106。

他 28 編

主要楽曲

1. 千葉泉（作詞・作曲）2018「マチカネ・ワニ・ソング」
2. 千葉泉（作詞・作曲）2016「ららら―歩いていこう」
3. 千葉泉（作詞・作曲）2016「MONITOS DE AWAJI（淡路島のおさるさん）」
4. 千葉泉（作詞・作曲）2015「郷愁の彼方に」
5. 千葉泉（作詞・作曲）2014「夢連れずれに」
6. 千葉泉（作詞・作曲）2011「それでも桜は咲く」
7. 千葉泉（作詞・作曲）2011「ゆとろぎの灯」
8. 千葉泉（作詞・作曲）2011「¡Ole, hola!（オレ・オラ！）」
9. 千葉泉（作詞・作曲）2009「Un vals para Víctor Jara（ビクトル・ハラに捧げるワルツ）」
10. 千葉泉（作詞・作曲）2009「ありがとう、いのち」

他 87 点